

綜合病院山口赤十字病院
創立100周年記念誌



山口赤十字病院

Japanese Red Cross
Yamaguchi Hospital

100th
Anniversary
1920-2020

創立 100周年記念誌
地域と生きる総合病院

Japanese Red Cross
Yamaguchi Hospital

100th
Anniversary
1920-2020

創立 100周年記念誌
地域と生きる総合病院

Mission Statement

日本赤十字社の使命

わたしたちは、
苦しんでいる人たちを救いたいという思いを結集し、
いかなる状況下でも、人間のいのちと健康・尊厳を守ります。

philosophy

〔理念〕

わたしたちは、「患者さん中心の地域連携」に取り組み、
あたたかな信頼のおける医療を提供します。

Basic policy

〔基本方針〕

赤十字の心(人道・公正・積極性)をもって、良質で温もりのある医療を提供します。

医療に関わるあらゆる安全管理に、最大の努力をします。

災害時には、地域の皆様の医療救護活動に努めます。

一人ひとりが生き活きと、働きがいのある病院を目指します。

CONTENTS

ご挨拶・祝辞	04
第1章 100年の歩み	10
第2章 100年目の今	
診る	25
治す	28
安心安全	32
支える	34
災害救護	37
新型コロナウイルス感染症との闘い	40
看護師の養成	43
研修医座談会	47
第3章 病院を支える人たち	
診療科	50
病棟等	58
部署	63
第4章 これからの展望	72
資料編	78



ごあいさつ

総合病院 山口赤十字病院長 末兼 浩史

当院は、1920年(大正9年)に山口県病院を日本赤十字社が譲り受け、日本赤十字社山口支部病院として発足しました。その後、1958年(昭和33年)に現在の名称である「総合病院 山口赤十字病院」に改称し、2020年(令和2年)に創立100周年を迎えることができました。

この間、人道・博愛の赤十字精神のもと、地域医療活動や看護師の育成、社会福祉活動、災害救護活動などに取り組んでまいりました。

現在、県央部から県北部、そして島根県西部にまたがる医療圏の基幹病院として、年間1万件を超える救急医療を含めた幅の広い急性期医療の提供に努めております。また、地域周産期母子医療センターや小児救急医療拠点病院として周産期医療・小児医療や緩和ケアを含めたがん診療に力を入れております。

こうした現在の地位を築くことができているのは、長年にわたり、山口県はもとより山口市、周辺市より様々なご支援やご指導を、地元医師会をはじめ地域の皆様方からは、当院の活動に多大なご理解とご支持を頂いてまいりましたおかげと厚く御礼申し上げます。また、これまでに当院の基盤を築いて来られた諸先輩方や職員の皆様方の日々のご苦労あってのことと思います。創立100周年を迎えるにあたり、あらためて、これらの力が今日までの私たちの支えになってきたことに心より感謝したいと思います。

私どもの病院には、「わたしたちは、“患者さん中心の地域連携”に取り組み、あたたかな信頼のおける医療を提供します。」という理念があります。理念とは、どうありたいか、何を目指しているのかとい

う病院の存在意義であり、またそこで働く職員の志でもあります。あたたかく、優しく、親切にという心を大切に地域の皆様に信頼される、より安全で質の高い医療を提供したいという私どもの気持ちを表したものです。

この理念を胸に、高度急性期および急性期医療を提供するとともに、各診療科の機能を結集して、山口の将来を担うこども達を守る周産期医療や小児医療を含めた、幅広い急性期総合病院の道を歩みたいと考えています。

特に、当院が100周年を迎える2020年初頭から新型コロナウイルス感染症が世界的に感染を広げ、本県にも多大な影響を及ぼしていますが、当院としましては、公的病院として、当医療圏内の医療を守り維持するという強い使命のもと、新型コロナウイルス感染症対策を含めた政策医療に積極的に取り組んでまいり所存です。

これからも、地域の皆様と手を取り合い、患者さんに継ぎ目のない安心な医療・介護を提供し続けられるよう、新しい時代にも対応できるような病院、信頼され続ける病院であるように努力を続けてまいります。

今後とも一層のお力添えをお願い申し上げます。



山口県知事

村岡 嗣政

創立100周年を祝して

総合病院山口赤十字病院が創立100周年を迎えられましたことを、心からお祝い申し上げます。

貴院におかれましては、新型コロナウイルス感染症の入院協力医療機関として患者の治療に携われ、また、小児を含めた救急医療の提供や、災害拠点病院としての役割を担われるなど、地域医療の推進に多大なる御貢献を賜っておりますことに、厚くお礼申し上げます。

また、このたび、創立100周年を迎えられましたことは、ひとえに末兼院長をはじめ歴代の院長先生、並びに関係の皆様方の御尽力の賜であり、深く敬意と謝意を表する次第です。

さて、人口減少や少子高齢化が進行する本県においては、出生数の減少や、出産年齢の高年齢化、分

娩を取り扱う医療機関の減少等の現状があり、安心して妊娠・出産、子育てすることができる環境づくりを支える医療提供体制の充実が求められています。

このため、県では、県政運営の指針となる「やまぐち維新プラン」において、重点的に進める政策として「結婚・妊娠・出産、子育て応援プロジェクト」を掲げ、周産期母子医療センターを核とした、妊産婦・新生児への医療提供体制の充実や、小児の緊急時の入院等の医療提供体制の充実に向けた取組を行っています。

こうした中、貴院におかれましては、地域周産期母子医療センターや小児救急医療拠点病院として、山口・防府、萩医療圏のハイリスク妊産婦や新生児、また、小児救急患者に必要な医療を提供されており、大変心強く思っています。

今後とも、地域における保健・医療の拠点としての役割を一層発揮され、地域の皆様の安心・安全の確保に大きく寄与していただきますよう、よろしくお願い申し上げます。

終わりに、総合病院山口赤十字病院の今後ますますの御発展を心から祈念いたしまして、お祝いの言葉といたします。

た市民の割合が実に8割以上に上っていますが、これも貴院の御尽力によるところが大きいものと、衷心より感謝いたし、敬意を表するところです。

昨今、高齢化の進展とともに、地域医療へのニーズが大きく変化し、また、増加してきていますが、貴院は公的病院として、こうした課題に対応するため、診療体制の再構築を図ろうとされており、令和5年度からの供用開始に向け進めておられる新病棟の建設においては、脳卒中センターの設置、女性専用病床の拡充等の整備を行っておられます。

こうした取組は、即ち本市の地域医療提供体制の高度化、充実につながるものと高く評価し、また、市民の更なる安心感の醸成につながるものと大いに期待をいたしております。

本市では、今後とも、貴院をはじめ関係医療機関との連携の下、本市の医療提供体制の更なる充実のために諸施策を推進していくこととしていますので、引き続き、御指導、御鞭撻を賜りますようお願い申し上げます。

終わりに、総合病院山口赤十字病院創立100周年記念誌の刊行を祝し、これからの貴院の益々の発展を心よりお祈し、祝詞といたします。

ご寄稿いただいたのは2021年8月です。



一般社団法人
山口市医師会
会 長

成重 隆博

おめでとうございます

私が山口赤十字病院に赴任して参りましたのは平成9年の1月、ちょうど40歳の時でした。当時は内科に所属し、その中の循環器グループの一員として内科一般の診療を担当しながらも心臓カテーテル検査や冠動脈インターベンションなどの循環器内科としての診療も担当していました。大学を卒業して循環器内科に入局して以来、関連病院でも循環器内科に所属していた私にとって、内科一般の患者さんを受け持つということは当初は少々気が重かったのを覚えています。そんな中、医局内のさまざまな分野の専門の先生方は皆良方で、相談すれば丁寧に教えてくれました。次第に内科のいろんな分野が面白くなり、当直で



山口市歯科医師会
会 長

市川 洋一郎

創立100周年を祝して

総合病院山口赤十字病院が創立100周年を迎えられるにあたり、山口市歯科医師会を代表して謹んで祝辞を申し上げます。

貴院は大正9年日本赤十字社山口県支部病院として発足されて以来、昭和33年に総合病院山口赤十字病院へ名称を改め、大正・昭和・平成・令和の長きにわたり今日まで地域医療を担ってこられました。ここに創立100周年を迎えられたことを慎んで喜び申し上げます。

これまで社会、時代の要請に応えるよう医療体制の充実を図り、地域になくてはならない基幹病院としての立場を築いてこられました。歴代の院長の方々を

さえ楽しみになってきました。若かったのですね。

前院長の名西史夫先生と現院長の末兼浩史先生とは飲み仲間で、月に1回は医局仲間や事務員さんたちと飲み会をしていました。名西先生はとても優しく、観音様のようなお方です。内科全般について知識と経験が豊富で、将来は名西先生のような医師になりたいと思っていました。末兼先生も名西先生に劣らず、豊富な知識と経験をお持ちでした。最初は少々とっつきにくかったのですが、お付き合いを重ねるうちにとても心優しい方だとわかり、今では親友、句友として尊敬しています。岡田正史先生は我が道を行く人という感じでしたが、私にとっては頼もしい親分でした。その後大堀展平先生が神経内科を、國近尚美先生が呼吸器内科を立ち上げて下さり、日赤の内科は黄金時代の始まりとなりました。

私が山口赤十字病院に在籍したのはわずか8年余りですが、内科臨床について多くのことを学ばせていただきました。私の最終学歴は山口赤十字病院だと思っています。

山口赤十字病院の100周年の佳き日、本当におめでとうございます。山口市医師会は今後も山口赤十字病院に対し、全面的にお支えをして参ります。

はじめとする医師・職員、関連するスタッフの方々の不断の御尽力及びその御労苦に対しまして敬意を表します。

歯科部門も発足当初の大正9年に創設され、以来100年、地元歯科医師会と患者の情報共有・紹介等をさせていただいており、また人的にも交流を深め良好な関係を築き口腔の健康の増進・維持に寄与していただいておりますことに深謝いたします。

こうした中、近年では少子高齢化の急速な進行への対応や健康福祉医療の連携等、医療においても大きな変革が求められ、医療制度改革や新たな感染症対策、大規模災害への対応等の課題も山積しております。地域中核総合病院として病院機能の向上が求められるにあたり、臨床研修病院や専門医教育病院として医療人の育成を担いながら、さらなる病院改革に今後も挑戦を続けて地域の方々の医療と健康のために務められることを期待いたします。

100周年を節目とされ、これから「患者さん中心の地域連携」に取り組み、あたたかな信頼のおける医療を提供するという理念をのもと、地域医療支援病院としてますますご発展されますことを祈念いたしましてお祝いの言葉といたします。



一般社団法人
山口市薬剤師会
会 長

岡 幸夫

総合病院山口赤十字病院創立 100周年にあたって薬剤師との連携

総合病院山口赤十字病院におかれましては、大正9年の創業から地域の拠点病院として役割を果たされ、令和2年に創立100周年を迎えられましたこと、心よりお祝い申し上げます。

私の幼少期の記憶では、木造の病院だったと微かではありますが残っています。また、薬学を学ぶ大学生として病院実習を2週間ほどお世話になった経験がございます。その実習で病院での業務を経験させていただきました。当時は、薬剤師の先生方12～13人くらいで1日に700～800位の処方箋を院内調剤され、午後からは入院患者さんの調剤や注射等、先生方が忙しく仕事をされていたと記憶しています。

私たち薬剤師会は、平成元年4月に法人化し今日に至っていますが、その間、総合病院山口赤十字病院では、平成6年に5診療科の処方箋を院外に出されることになりました。それに応じて、本会では、病院内にFAX室を設け、患者さんが指定する全ての処方箋応需薬局を対象にFAX送信サービス業務を開始しています。

また、平成7年に6診療科が、平成8年には2診療科の処方箋が出され、これにより全科の処方箋が院外処方になっています。

これに伴い、本会では平成8年10月に山口赤十字病院から出される処方箋応需のため薬局を開局しています。私たち保険薬局は、院外処方に対応するため病院薬剤師の先生方との連携が不可欠になりました。連携強化や薬剤師の専門的な研修機会を通じて交流が進みましたが、更に高度薬学管理機能を強化する必要からより連携を深め、多くの情報を共有する時代に入ってきました。今後は、処方箋やトレーシングレポートを情報ツールとしてより関係を密にし、新しい時代に沿った関係を構築できればと考えています。

私たち医療に従事する一員といたしまして、総合病院山口赤十字病院創立100周年を心よりお祝い申し上げ、地域の拠点病院として益々のご活躍をご祈念申し上げます。



公益社団法人
山口県看護協会
会 長

西生 敏代

総合病院山口赤十字病院 創立100周年によせて

総合病院山口赤十字病院が創立100周年を迎えられましたことに心よりお慶び申し上げます。

また、このたび、その節目に記念誌を発刊されたことは、人道・公正・積極性の赤十字の心のもと地域医療、災害救護活動等の要として、これまで尽力されてきた諸先輩をはじめ関係者の皆様のご功績を明らかにし、未来に向けた道標となる意義深いことと存じ、心から敬意を表します。

さて、少子・超高齢化社会の到来に対応すべく、政府が進める社会制度改革は、団塊の世代が後期高齢者に到達する目標年度の2025年が目前に迫っています。また、世界中を襲うパンデミックとなった新型コロナナ

ウイルス感染症は、懸命な医療従事者等のご尽力により、感染拡大の波をその度に押さえ込み、ワクチン接種も随時進められているところですが、いまだ、本格的な終息への目途は見えていません。

こうした中、総合病院山口赤十字病院が地域に提供され続けてこられたような高い看護の力が求められていると感じているところです。「全世代型地域包括ケア」の実現、感染症対応やワクチン接種など住民の皆様に最も身近な専門職として、社会変革に対応し地域の皆様が安心して、日々の生活を営める社会の一助となれるよう取組んでいく必要があると強く思っています。

このため、本協会では、看護職としてどのような事態にも対応できるよう、ひとりひとりの質・能力の向上、将来を見据えた看護教育の充実を続けるなど、皆様のお力を借りながらあるべき姿の実現を図ってまいります。

今後とも、本協会が看護職能団体としての役割を果たしていくため、適宜、適切な対策を講じてまいりますので、皆様方のご支援、ご協力をお願いいたします。

終わりに、総合病院山口赤十字病院の益々のご発展と関係各位のご健勝を祈念いたしましてお祝いの言葉とさせていただきます。



山口県病院協会
会 長

三浦 修

創立100周年を祝して

総合病院山口赤十字病院創立100周年、誠におめでとうございます。

山口赤十字病院は、大正9年に日本赤十字社山口県支部病院として発足、その後山口赤十字病院と改称し、昭和33年には総合病院山口赤十字病院と改称しています。その長い歴史の中で常に人道・博愛の赤十字精神を基本に、他県にも及ぶ幅広い医療圏における、高度急性期医療、周産期医療、小児を含めた多くの救急医療や緩和医療、災害医療、そして現在のCOVID-19診療まで、地域における基幹病院としての大きな役割を果たして来られました。山口赤十字病院としての、100年に亘るその膨大な実績と地域医療における弛まぬご尽力に対し、深く敬意と感謝を申し上げる次第です。



公立大学法人山口県立大学
理事長

前川 剛志

総合病院 山口赤十字病院の 100周年を祝して

総合病院山口赤十字病院はこの度創立100周年を迎えられ、誠におめでとうございます。“人道・博愛”の赤十字精神の下に、大正9年(1920年)に日本赤十字社山口支部病院として診療を開始され、地域の基幹病院として山口市民、山口県民に対して100年間の長きに渡り、高度な医療を提供してこられましたことに対して、衷心より敬意を表します。そして、日常診療以外にも看護師の養成や血液センターを運営され、これらの面でも山口県内の医療に多大な貢献をして来られましたことに対して、感謝申し上げます。

また、ナイチンゲール精神を背景に、災害救護活動が続けて来られました。昭和21年12月の南海地震に

山口赤十字病院と山口県病院協会とは、古くから深い関わりがあります。戦後、政府は病院団体の育成が必要との指示を発し、これを受けて昭和26年に山口県病院協会が発足しました。初代会長に山口赤十字病院院長の大島宗二氏、第2代会長に同じく山口赤十字病院院長の廣瀬信善氏にご就任頂いたという歴史があります。その後、名西史夫前山口赤十字病院長、末兼浩史現病院長に至るまで、歴代の多くの先生方に、病院協会の役員としてご尽力頂きました。また、令和2年9月には、山口県病院協会の会内組織として、山口県看護部長部会を立ち上げましたが、その初代部会長にも、山口赤十字病院の大林由美子看護部長にお引き受け頂きました。

少子超高齢社会の中で、医療需要ならびに医療提供体制も急激に変化しています。地域医療構想の進む中、将来に向けて安心・安全な医療提供体制を堅持するためにも、県内での病病連携、病診連携をより強固なものにし、さらに行政、県民ともしっかり連携していかなければなりません。

総合病院山口赤十字病院の、より一層のご発展、ご活躍を心より祈念し、お祝いの言葉とさせていただきます。

始まり、平成7年1月の阪神・淡路大震災、平成23年3月の東日本大震災、平成28年4月の熊本地震など、長年にわたり日本各地で実績を積まれておられます。昨今の災害では、DMAT隊を編成されていち早く現場に出勤し、救護・診療活動をされている様子はマスコミでよく拝見しており、国際的にもバングラデシュやヨルダンでの救護を実践しておられます。

山口県立大学との関係では本学が貴院の近隣にあることも幸いし、多くの看護学生の臨地実習で大変お世話になっています。また、卒業生も看護師として多く受け入れて頂き、この紙面をお借りして御礼申し上げます。昨年2月21日には【総合病院山口赤十字病院と公立大学法人山口県立大学との包括的な連携・協力に関する協定書】を交わさせていただきました。今後は学生の臨地実習、卒業生の就職、貴院看護師の研究や研修会の講師など多くの点で連携・協力を強化して、今まで以上に良い関係を継続して行きたいと存じます。

総合病院山口赤十字病院職員の皆様方のご健勝と貴院の益々のご発展を祈念し、創立100周年のお祝いの言葉とさせていただきます。

草創期

（日本赤十字社山口支部病院時代から）
戦中・戦後復興期（山口赤十字病院時代）



初代院長
西野 忠次郎
1913年8月～
1920年11月



三代院長
林 政次
1921年10月～
1926年12月



五代院長
伊勢 良男
1935年10月～
1949年8月

1943

日本赤十字社
山口支部病院の名称を
「山口赤十字病院」と
改称しました。

1946

終戦に伴う外地引揚者並びに復員兵の殺到により、
日本赤十字社は、下関市に臨時救護所を設置して、
山口支部より救護班を派遣したが、地元の要望に応え、
昭和21年4月「日赤山口支部下関診療所」を開設しました。
その後、昭和26年4月から山口赤十字病院に所属を変更し、
附属下関診療所と改称し、昭和37年6月まで診療を行いました。

1952

社会事業部において
医療社会事業を開始しました。
また、災害時における
医療救助への
出勤等地域医療に
積極的に貢献しました。

1954

結核病棟の不足に鑑み、
昭和29年5月に50床、
翌30年に50床を
増築し100床とし、
近代的結核医療の
充実に努めました。



二代院長
稲田 進
1920年11月～
1921年10月



四代院長
藤田 卯二六
1926年12月～
1935年9月

1939

戦傷病兵見舞いのため、
東久慈宮殿下がご来院
されました。(S14.6.2)



1945

昭和20年2月から
8月まで、海軍病院
として傷病兵の
収容封助を命ぜられ
終戦を迎えました。



六代院長
大島 宗二
1949年8月～
1953年9月

1950

結核病棟及び
伝染病棟を山口市へ
無償譲渡しましたが、
診療は本院に
委託されました。



七代院長
廣瀬 信善
1953年9月～
1959年7月

1920 日本赤十字社 山口支部病院として発足

大正9年

山口県病院を山口県から無償で譲り受け、大正9年4月、日本赤十字社山口支部病院として発足しました。内科、小児科、外科、耳鼻咽喉科、眼科、産婦人科、歯科7科で診療を行い、病床数は223床でした。また、救護看護婦生徒の養成も開始しました。



山口県病院の外観



閑院宮同妃殿下、支部総会及び開院式へご臨席

1923 設立時の大改築

大正12年

大正10年から病院の改築に着手し、大正12年に、本館及び1号・2号病棟及び伝染病棟の新築完工しました。その後、昭和4年には鉄筋コンクリート造2階建の記念病棟を、昭和7年には鉄筋コンクリート造2階建の5号病棟を新築しました。さらに、昭和13年には講堂館を、昭和17年には竣工木造モルタル2階建の新病棟6号病棟を新築しました。



本館棟の外観と内観

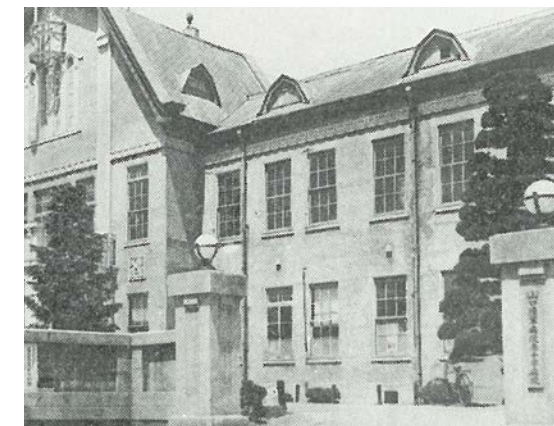


1937

昭和12年

陸軍病院として 戦時衛生勤務封助

支那事変の勃発に伴い、昭和12年12月より昭和15年5月まで陸軍病院として、戦時衛生勤務封助を命ぜられ傷病兵の診療を行いました。



戦後の成長期

総合病院山口赤十字病院へ改称



八代院長
影山 民治
1959年7月～
1969年1月

1965

昭和40年4月に
救急告示病院に
指定されました。



九代院長
吉富 正一
1969年2月～
1989年3月

1977

看護婦寄宿舍竣工

日本赤十字創立100周年を記念し、
ギリシャ赤十字社から贈られた
記念樹(鈴懸の木「ヒポクラテスの木」)
は全国へ分与されました。



鈴懸の木

1983

山口県病院時代から
通算して100周年を
迎えました。



十代院長
門屋 昭一郎
1989年4月～
1997年3月

1958

昭和33年1月1日、
名称を「総合病院 山口赤十字病院」
(現在の名称)と改称しました。

1969

赤十字医療施設の特殊性に鑑み、
昭和44年に成人病センターを設立し、
人間ドックの開診、健康管理室
(昭和46年開設)及び
リハビリテーション病棟の開設
(昭和47年)を行いました。

1975

病院施設内学級が
始まりました。



施設内学級開級式の様子

1979

昭和54年4月に第二次
救急医療施設に指定さ
れました。平成2年4月
からは平日夜間二次救
急体制が始まりました。



体制が整った二次救急医療

1960 大改築

昭和35年

昭和34年から第一期工事に着手し、昭和35年7月に鉄筋コンクリート造4階建の
西病棟(現在の厚生棟)を竣工しました。その後、昭和37年から第二期工事に着
手し、鉄筋コンクリート造4階建の東病棟が竣工しました。これにより病室、手術
室、厨房、ボイラー等の整備、看護婦寄宿舍の改築が完了しました。



西病棟・東病棟(写真中央)

1978

昭和53年

昭和52年8月
看護専門学校の
新築に着手し、
昭和53年3月に
完成しました。



建築中の
看護専門学校



完成した看護専門学校

1980 大改築

昭和55年

昭和53年8月、老朽化し
た本館棟の増改築に着手
し、昭和55年2月に鉄筋コ
ンクリート造7階建の南病
棟(外来、病棟、厨房)RI
棟及びエネルギー棟が完
成しました。既存の東病
棟、西病棟を東西病棟と
改称し、南病棟において
昭和55年3月10日より外
来診療を開始しました。



南病棟



竣工記念式典の様子

平成時代・医療機能拡充期

地域から求められる医療に着実に
医療機能の充実に努めてまいりました

1994

院外
処方せんの
発行を
始めました。

1998

災害拠点病院に
指定されました。



大規模災害訓練



2002

平成14年7月に、救医療圏を含めた
小児の入院を要する
救急医療機関として、
県から小児救急医療拠点病院に
指定されました。

2005

平成17年3月に、大正9年に
救護看護婦養成所と
設立され84年間に3,366名の
卒業生を輩出した
山口赤十字看護専門学校が閉校しました。



閉校記念誌



最後の卒業式



閉校記念碑



十一代院長
為近 義夫
1997年4月～
2009年3月

2000

・平成12年1月に県内で
初めて緩和ケア病棟(25床)
が承認(1月)されました。



緩和ケア病棟

・透析機器を旧泌尿器病棟へ
移設し、「透析センター」が
発足しました。



透析センター



小児病棟のクリスマス会の様子

2004

・平成16年9月、
旧血液検査室跡に外来化学療法室を
開設しました。



化学療法室

・平成16年10月、
回復期リハビリテーション病棟(35床)を
承認されました。ただし、平成25年4月には
再び一般病棟へ転換しました。



回復期リハビリテーション病棟の廊下での歩行練習

1998～2000 大改築

平成10年～12年

平成9年7月に増改築工事に着手し、平成10年3月に実習棟(保育所・県立大学実習室・看護婦宿舎)が完成し、平成11年10月に新東病棟、ライナック棟が完成しました。さらに、平成12年2月に南病棟、西病棟の改修が完了し、その後、駐車場の拡張工事等を行い、平成12年7月に3カ年にわたる大工事が完成しました。



新東病棟

2005

平成17年

院内広報誌 山赤かわら版 創刊

地域住民に発信する医療・健康情報の広報誌として平成17年に「山赤かわら版」を創刊しました。以後、毎月発刊し、今では通算200冊を超えました。専門医の特集のほか、簡単に作れるヘルシーメニューや最新ニュースなど、多くの方に山口赤十字病院について知ってもらい、より身近で親しみやすい地域密着型の病院を目指しています。



山赤かわら版 ヘルシーメニューのあゆみ

山赤かわら版に掲載している「旬の食材を使ってヘルシーメニュー」。このコーナーは、患者さんからの「病院食のレシピが知りたい!」という声にお応えして誕生しました。当初は白黒で、イラストも手書き、情報量も少なく、やや寂しい紙面となっていました。平成30年からはカラー版となり、内容も栄養と健康をテーマに作りやすいメニューを厳選しています。

当院で生まれたこだわりのレシピは、令和2年度までに150品以上になりました。「食事で健康を届けたい」「食べる喜びを感じて欲しい」との想いを込めて、お届けしています。





研修風景

2007

平成19年9月
管理型臨床研修病院に
指定されました。

2009

平成21年4月
「院内助産システム」
を導入しました。



院内助産システム



NICU

2006

平成18年1月に
地域周産期母子医療センターに認定され、
地域の高度な周産期医療の提供に努めています。

2008

- ・平成20年2月に地域がん診療連携拠点
病院に指定されました。(平成26年度まで)
- ・平成20年5月
助産師外来を始めました。



十二代院長
名西 史夫
2009年4月～
2020年3月

緩和ケア病棟開設への思い

すえなが内科在宅診療所
(山口赤十字病院 元副院長) 末永 和之



創立100周年おめでとうございます。私は山口赤十字病院内科・緩和ケア内科に昭和54年10月から平成25年3月まで35年間の長きに渡って奉職させていただきました。現在は平成25年4月よりすえなが内科在宅診療所を開設して、日夜在宅医療に取り組んでいます。

平成2年2月、「末期医療の充実とは何か、人間の死を尊重してくれるということだ」と訴えたがん患者との出会いがホスピス緩和ケアへの歩みとなり、早速、山口赤十字病院内に「ターミナルケア研究会」を設立。平成4年に山口県内で初めての3床の緩和ケア病床を設置すると同時に在宅のがん患者の訪問診療を開始しました。病院内に訪問看護を設置し平成6年に山口県緩和ケア研究会を立ち上げ、山口県内のすべての病院に普及啓発を始めました。ホスピス緩和ケアの輪を広げるために、行政に働きかけ、平成5～7年に山口県における緩和ケアのあり方に係る協議会を3ヶ年事業として行い、山口県における緩和ケアのあり方への提言を行いま

した。平成12年、全国の日本赤十字社93病院の中で初めて、25床の緩和ケア病棟を新設。病棟全体が癒しの場となり、病室が自宅になるように各部屋には靴を脱いで入るようにしました。

平成15年、山口市と在宅緩和ケア推進事業をスタート。全国に先駆けて、40歳以下のがん末期患者も福祉サービスを受けられるようにしました。また、平成19年には山口県在宅緩和ケア対策推進事業が始まり、山口赤十字病院に山口県在宅緩和ケア支援センターを開設しました。

多くの方が苦しみの中にあっても人生の最終章を希望を持って生きていけるように、緩和ケア病棟が地域においてその役割を果たしてくださるように祈りたい気持ちです。

透析センターの開設について

山口赤十字病院 名誉院長 名西 史夫



当院の透析医療は1996年から開始されました。それ以前は急性腎障害の症例でも他院にお願いせざるを得ない状況でしたので、うれしいニュースだったのではないかと思います。旧西病棟にあった泌尿器科の病室に1台の個人用透析装置(コンソール)を設置し、急性腎障害例の治療や慢性腎不全症例の透析導入を開始しました。次第に導入患者さんが増え、通院透析(外来維持透析)も開始しましたので、透析装置を2台、3台と増やして対応していましたが、スペースに限界があり旧NICUに引っ越して規模を拡大しました。2000年に東病棟の完成に伴い、泌尿器病棟が移転しましたので、そのあとを改装して移転するとともに、当時の為近院長のお勧めもあり、透析センターとして発足することになりました。

広いスペースに透析装置10台、個室透析室2室、通院透析患者さん12名とこじんまりした家庭的雰囲気でのスタートでしたが、その後は予想を上回るペースで患者さんが増え、透析装置をスペースいっぱいの27台まで

増やしたものの、2012年には通院透析患者さんは70名を超え、連日2クルールの透析が必要となり医師、看護師、臨床工学技士の方々は大変だったと思います。2014年に市内に他の透析施設が開設され、通院透析患者さんは少し減りましたが、院外の施設から合併症の治療目的で紹介入院される患者さんが増え、急性期総合病院の透析施設らしい診療内容になってきています。

センターの特徴は、血液透析以外に血液濾過透析や血漿交換、血液吸着などの急性血液浄化法を積極的に行っていること、内科、泌尿器科の医師、看護師、臨床工学技士、薬剤師、管理栄養士、医療ソーシャルワーカーをはじめ多職種の職員が患者さんを中心に協同して医療・ケアを実践していることだと思います。10年、20年以上の透析歴を持つ高齢患者さんが増加しており、患者さんの総合的なサポート体制が今後ますます必要になることと思います。





DMAT隊

2011

平成23年10月、
山口県DMAT指定病院に認定されました。

2012

- ・平成24年6月 院内に健診センターを設置しました。
- ・平成24年7月に東3階病棟にGCUを6床設置(NICUを15床から9床へ変更)し、新生児医療の充実を図りました。



健診センター設置



GCU

2010

平成22年11月、山口市、山口市医師会、
吉南医師会、当院が協力して、
院内に山口地域夜間子ども急病センターを
開設しました。
※令和2年2月 対象地域に防府市を追加しました。



こども急病センター

2013

平成25年6月、南3階病棟にHCU(4床)設置し、
重症者ケアの提供体制の充実を図りました。



HCU



2013 山口赤十字病院公式キャラクターが決定！ 平成25年 ～初めまして!やまクロです!～

平成25年病院の山口赤十字病院の公式キャラクターを地域などから広く募集し、およそ100作品を超える応募の中から栄えある3作品が選ばれました。この他にも特別賞として小学生3名が選ばれました。優勝に輝いたのは、渡辺光おさんの「やまクロ※」。頭の形には二つの意味があり、一つは、お見舞いの花や生命力をイメージしたチューリップの花。もう一つは、山口県の「山」の文字で、地域性を表現されています。見

た人が「明るく健やかで過ごせるように」という思いが込められており、キャラクター共々、皆様に愛される病院になるよう頑張っていきたいと思います。

※キャラクター名については
「やまぐちレッドクロス」からの連想で、
研修医の先生方のアイデアを採用しました。



1位:やまクロ



2位:ニッセキくと仲間たち



3位:なのか



病院キャラクター表彰式

こども急病センターの 開設にあたって

山口赤十字病院 第一小児科部長 兼
こども急病センター長 大淵 典子



平成8年には年間約4,000人だった時間外の小児受診者数が平成17年には約8,600人と倍増し、山口市全体では年間約15,000人に達しました。途中、当院に市の小児救急センターを併設する案が出るも実現せず、済生会病院から小児科常勤医撤退にあたり、休日夜間診療所に内科系、外科系と別に小児科を出務させる対策がとられましたが、当院への患者集中は解消しませんでした。その後、医師会が市民公開講座を開き小児救急の危機的状況の啓発・不要不急の受診抑制に動き、それをきっかけに併設型小児救急について再度検討し、平成22年11月山口市、山口市医師会、当院が提携して、当院に山口地域夜間子ども急病センターが開設されました。

一番の問題は出務できる小児科医の数が山口市だけでは少なすぎる点でしたが、防府市の開業医、県立総合医療センターと小郡第一病院の勤務医などの協力を得てスタートできました。令和2年からは防府市、防

府医師会も参加し、山口・防府地域夜間子ども急病センターになり、この地区の子どもたちの一次救急医療は充実しています。受診抑制の啓発、患者家族など市民ベースの救急啓発の動きの成果もあり、患者数は年間3,000人程度で推移していましたが、最近COVID-19の影響で病院への受診控えが強くなり、子ども急病への受診者数も去年は約1,000人に減っています。不要不急の受診がいかに多かったかと考えさせられる今日の頃です。

2017

病床削減や病棟建替などを含む当院の「公的医療機関等2025プラン」を作成し、平成29年10月の圏域地域医療構想調整会議に提出しました。

2016

平成28年4月に入退院支援センターを設置しました。
平成28年9月、地域医療支援病院として承認されました。
平成28年10月から院内に内視鏡外科手術センターを設置し、腹腔鏡手術など内視鏡外科手術に積極的に取り組んでいます。



内視鏡外科手術センターのポスター



入退院支援センターの開設にあたって

山口赤十字病院 元看護部副部長 木村 啓子



患者さんが安心して療養できるように、入院前から情報収集を行うとともに、外来・病棟での入院業務のスリム化を目指し、2015年7月に入院センターを立ち上げました。将来構想として、入退院支援センターへの発展を目指しており、一からの組織化には、多職種の理解が必要であり、様々な会議を通して診療科や看護部門、事務部門の協力を得ました。入院前面談は、外来診療後になるため、患者さんの病院での拘束時間が長くなり、当初は入院センターの役割を理解してもらうのに、苦労が尽きませんでした。

2016年の診療報酬改定を機に、退院支援を含めた業務拡大を図り、看護師だけで構成していた入院センターから、医療ソーシャルワーカー（MSW）を含めた多職種協働の入退院支援センターに発展させること

ができました。予約、緊急を問わず入院決定となった患者さんに入院前面談を行うことで、療養支援につなげ、病棟業務の負担軽減にもつながりました。退院支援加算の取得は、事務部門を含め病院全体で取り組んだ結果、介護支援連携指導料も含め加算件数を伸ばし病院経営にも貢献できました。さらに、2018年4月からは新たに入院支援業務に関する入院時支援加算が算定できるようになり、加算の増加を図るとともに、加算額に見合った質の高い入退院支援に努めています。

医療提供のあり方は、地域で患者を治し支える包括体制になっています。今後も院内外の多職種と協働し、患者さんが住み慣れた地域で安心して療養生活が送れるよう支援していきたいと思っています。

2020 大改築 令和2年

老朽化した厚生棟、南病棟を取り崩し、新病棟（北病棟鉄筋コンクリート造りで一部鉄骨造りの地上6階建て）の建設工事に着手、2022年完成を目指しています。

山口赤十字病院創立100周年



安全祈願の燵入れの儀

- ・令和2年2月 山口県立大学と包括連携協定を締結しました。
- ・令和2年4月 赤十字病院として100周年を迎えました。

未来へ



yamatama バウムクーヘン

令和2年、創立100周年を記念して山口市徳地の出雲ファームとコラボし、グルテンフリーで砂糖70%カット、玄米粉入りの体にやさしいバウムクーヘン「yamatamaバウム」を開発いたしました。当院キャラクター「やまクロ」と出雲ファームキャラクター「とりたま」がタッグを組んだデザインが目印です。地域の皆様へ感謝の気持ちと健康を願って誕生したスイーツです。院内の売店で、絶賛発売中です。



十三代院長
末兼 浩史
2020年4月～



内視鏡外科手術センターの開設にあたって

山口赤十字病院 副院長 兼 第一泌尿器科部長 兼
内視鏡外科手術センター長 須賀 昭信



永井先生の特別講演の模様

内視鏡外科手術センターは外科、整形外科、脳神経外科、泌尿器科、産婦人科、眼科、耳鼻咽喉科の7科で構成され、市民の方々に当院の内視鏡外科手術を知っていただく目的で2016年に開設いたしました。山口日赤100年の歴史の中ではまだ若い組織ですが、立ち上げまでの経緯について私の立場から紹介させていただきます。

私が始めて腹腔鏡手術を行ったのは1994年です。日赤に赴任してから腹腹腔鏡手術（HALS：ハンドアシスト腎摘除術）を細々と続けていましたが、2015年に転機が訪れました。繁田正信先生（呉医療センター）の手術を見学し腹腔鏡手術が飛躍的な進歩を遂げていたことに衝撃を受け、繁田先生の指導のもとで最新の腹腔鏡技術を習得することを決めました。そして2016年に腹腔鏡下前立腺全摘除術、2017年に腹腔鏡下膀胱全摘除術を開始し、紆余曲折を経て当科での腹腔鏡手術が本格的に始動することとなりました。

同時期に外科の山中先生が日本内視鏡外科学会技術認定医を取得し（2016年）、また婦人科でも腹腔鏡手術が増加していたこともあり、当院の中で内視鏡外科手術センターの立ち上げ機運が盛り上がり、2016年の開設に至りました。2017年1月には九大の永井英司先生に特別講演をしていただき、またセンターのロゴマークやポスターも作成しました。現在は手術機器等の共同購入や4台（うち3-Dシステム1台）の鏡視下用内視鏡システムの運用などを行っています。

当院での腹腔鏡手術の件数は増加傾向にあり、将来も増加することが予想されます。今後も手術医が腹腔鏡手術をストレスなく行えるようにサポートするセンターであり続けるよう努力いたします。

写真で見る病棟の変遷



現・東病棟(1999年)

2020年(令和2年)



山口赤十字病院



新・北病棟(2022年完成予定)

令和

平成



現・南病棟(1980年)



旧東・西病棟(1960年)

昭和

1920年(大正9年)

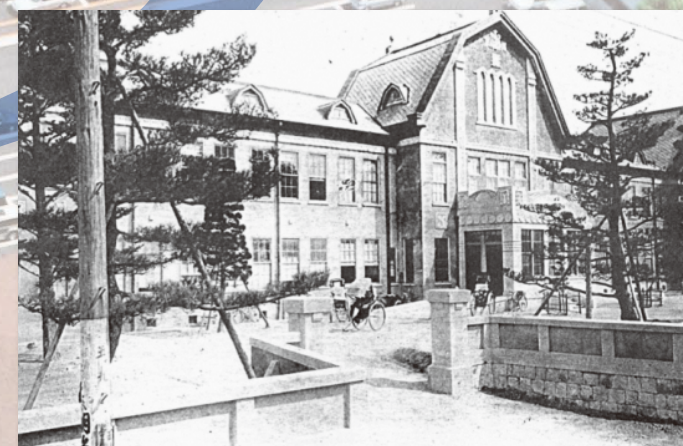
日本赤十字社へ移管

大正

明治



山口県山口病院(明治末年)



旧本館棟(1923年)